

奈良山須恵器窯の分布調査

1 はじめに

平城京の北方には、ゆるやかな丘陵がつらなる。この奈良山丘陵を越えると、平城京への物資流通の大動脈である泉川（現在の木津川）が流れる。奈良山丘陵には、平城京に関連する生産遺跡があることが、古くから知られていた。1970年代には平城ニュータウンの大規模な造成がはじまり、1972年以降、7万㎡をこえる範囲が発掘調査された。それに先立つ分布調査が1964年と1965年におこなわれたことは概報にも記されている¹⁾。

しかし、それより前の1962年に、平城宮・京の瓦が須恵器の生産体制を探る目的で、奈良山一帯に広がる窯跡の分布調査がおこなわれたことは、あまり知られていない²⁾。分布調査を指示したのは、当時平城宮跡発掘調査部の坪井清足である。坪井の依頼を受け、実際に踏査をおこなったのは、檜崎彰一先生の門下で猿投窯の調査などにも参加していた山田英介氏であった³⁾。

この時の資料が、奈文研に残っている。山田氏が須恵器窯を専門とすることもあり、収集した資料には須恵器が多く含まれていた。これら須恵器は、奈良時代前半から中頃のものとみられ、平城京・宮から普遍的に出土するものと形質的に酷似しており、きわめて興味深い。

奈良山での須恵器生産は、生駒窯と並んで平城京近郊の生産地として注目されており⁴⁾、断続的ながら発掘調査もおこなわれている。須恵器専用窯として発掘調査された唯一例の西柵窯跡⁵⁾、瓦陶兼業窯であることがわ



図34 1962年の分布調査の成果をもとに作成された図面

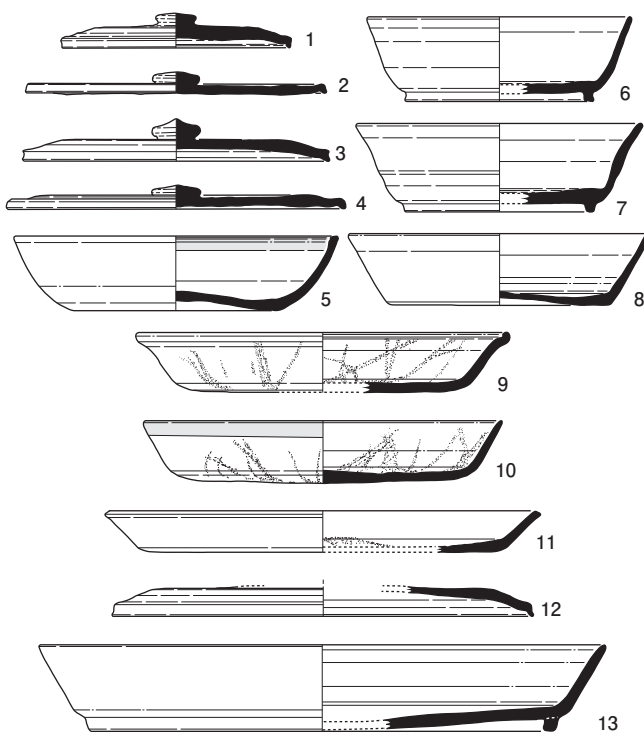


図35 新池1号窯（奈良山第36号窯）採集須恵器 1：4

かった瀬後谷窯⁶⁾、鹿背山窯⁷⁾ などである。

今回、分布調査で採集された新池1号窯の資料を紹介するとともに、奈良山丘陵での須恵器生産を再考する嚆矢としたい。

2 分布調査の記録

山田氏によっておこなわれた探査の記録は、2千分の1地形図に残された窯跡の場所と、調査の日記、採集資料である。探査日記は1961年6月2日から始まる。ノートには同月22日の第44号窯までの記録が記されるが、地形図には第53号まで書かれているため、その後も調査が継続されたことがわかる。

探査の方法は、須恵器や瓦の原材料となる粘土が採取できる露頭の標高を目安とし、等高線沿いに窯跡を探して歩く手法であったようだ。6月4日の日記には、押熊から「乾谷にまで標高60～75mの等高線を歩く」などと記されている。

音如ヶ谷、歌姫、乾谷、中山などで瓦窯を多く発見した山田氏は、加茂町の赤田川上流域で、ようやく須恵器の窯を発見する。現在の新池窯（第36・37号窯）、西小窯（第38・39号窯）、栗田窯（第40・41号窯）である。とくに新池1号窯からは杯A、杯Cなどの供膳具が整理箱1杯弱、採集されている（図35）。

これらの須恵器窯が花崗岩の岩盤と粘土層の境に構築されていることに着目した山田氏は、鹿背山不動についても、築窯の好適地とみているが、窯の発見には至らなかったようだ。しかし、現在の京都府遺跡地図には、鹿

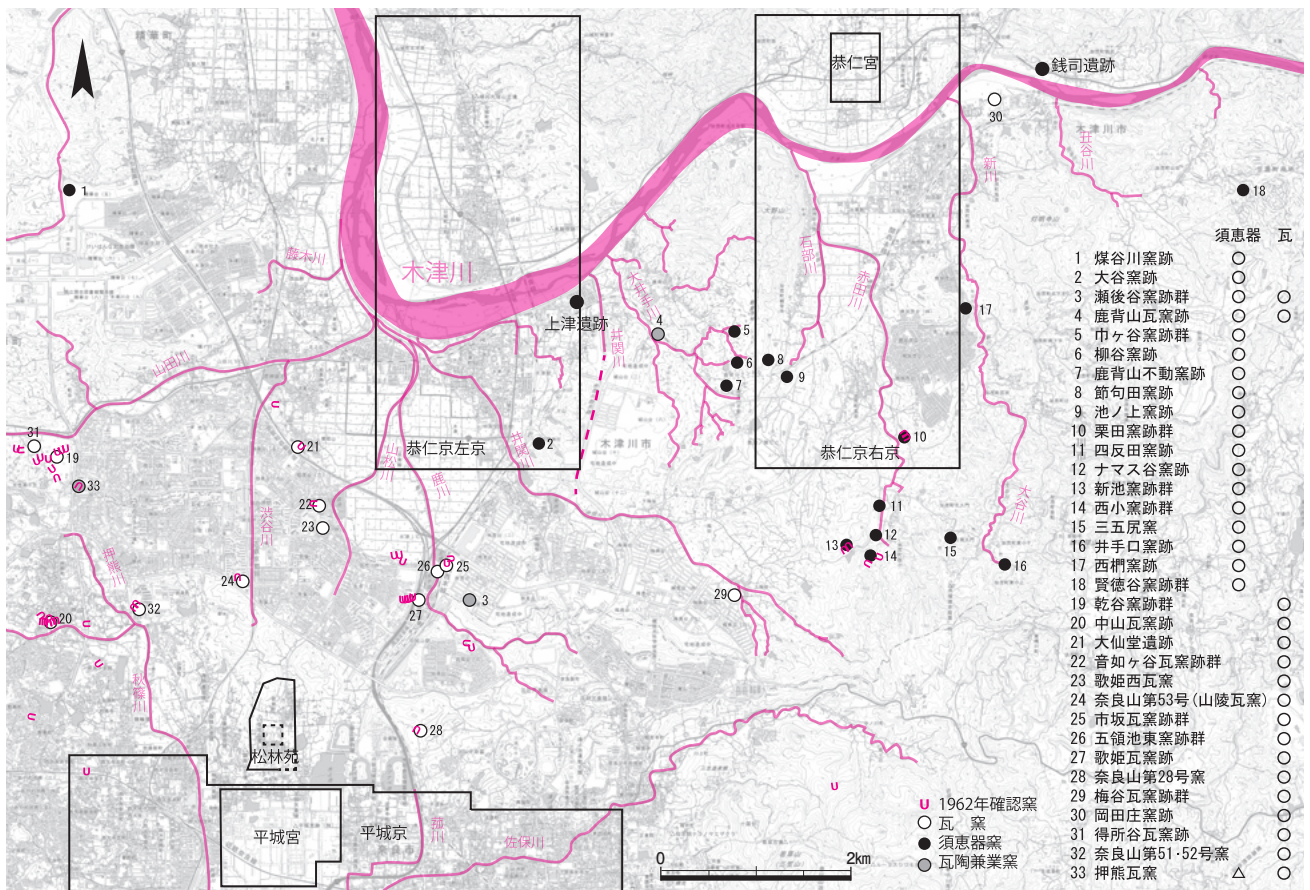


図36 奈良山における窯跡の分布図（国土地理院電子地形図25000をもとに作成）

背山不動窯跡、巾ヶ谷窯跡群、柳谷窯跡、節句田窯跡、池ノ上窯跡など、いずれも須恵器窯として登録されており、山田氏の指摘は正鵠を得ていたといえよう。

3 採集した須恵器資料

山田氏の分布調査によって奈良時代の須恵器が採集されているのは第36・37号（新池窯）、第28号（奈良山第28号）、第38号（西小窯）、第40・41号（栗田窯）、第24号（市坂窯）である。なかでも、第36号窯からは図35に掲げるような供膳具が採集されている。器種は杯A（8・10）、杯B（6・7）、杯B蓋（1～4）、杯C（9）、杯E（5）、皿C（11）、皿B（13）、皿B蓋（12）である。胎土は灰白色を呈し、焼成温度がやや低い印象を受ける。採集資料のほとんどが供膳具であるが、奈良山28号窯のみ甕の破片がある。

4 奈良山における窯業生産

京都府と奈良県の遺跡地図に登録されている窯跡の分布を図36に示した。奈良山丘陵の西半には瓦窯が多く、東半には須恵器窯が多く築かれていることがわかる。須恵器窯が集中するのは、赤田川上流域の須子谷と呼ばれる支谷である。窯跡の発見は、宅地造成などの土地開発が要因となることが多いが、1970年代の開発は、主に奈良山丘陵の西側で進められてきた。須恵器窯が分布するとみられる東側、加茂町周辺はいまだ山林や水田が広

がる地域である。そのため、重見泰氏も指摘するように⁸⁾、奈良山丘陵の須恵器窯には発掘調査の手がおよびにくかったのであろう。

瓦窯と須恵器窯の分布の背景には、築窯条件の違いや、平城京への物資運搬のルートやコスト、燃料となる薪材などの確保など、さまざまな要因があったと予想される。現状では、推測の域をでないが、奈良山丘陵東半が須恵器の生産地であったなら、その上流域が須恵器集積地でなかったかと考えられ、この地が「甕原」と呼ばれたこととも関連する可能性がある。今後、消費地から出土した須恵器の分析とあわせて、奈良山における須恵器生産の実態解明を試みていきたい。（神野 恵・尾野善裕）

註

- 1) 奈良国立文化財研究所『奈良山』1973。
- 2) 石井清司『宮都の窯業生産—古代生産遺跡概説』2013において、分布調査があったことは触れられている。
- 3) 坪井清正「奈良の都の官瓦窯」『奈良県観光』199、1973。
- 4) 植野浩三「大和における須恵器窯跡」『総合研究所所報』8、奈良大学総合研究所、2000、重見泰「律令時代の須恵器生産—生駒古窯跡群からみた宮都の発展と須恵器生産の展開」『古代学研究』156・157、2002。
- 5) 加茂町教育委員会編『西門窯跡』賀茂町文化財調査報告第2集、1981。
- 6) 石井清司・伊賀高弘・森島康雄『奈良山瓦窯跡群』京都府遺跡調査報告書第27冊、1999。
- 7) 竹原一彦「鹿背山瓦窯跡第1次」『京都府遺跡調査報告集』第126冊、2008、竹原一彦・柴 彦彦・渡辺理気・大谷博則「鹿背山瓦窯」『京都府遺跡調査報告集』第131冊、2009。
- 8) 前掲4、重見2002。